

シリーズ 地歴・公民科の授業づくり 1

「5秒で書ける世界地図」を使った 世界史の授業 ～授業開きでジョン万次郎をテーマに～

千葉県立柏高等学校
周藤新太郎

私の勤務校では、ほとんどの生徒は大学へ進学するが、世界史B(2年生3クラス120名)の授業で常を感じることは世界地理の知識の足りなさである。この実態を考慮して、ここ数年、4月の最初の授業では2時間を使って、前半はメンタルマップと「5秒で書ける世界地図」(以後「略地図」)の書き方、後半は「略地図」を使つてのジョン万次郎の授業をおこなっている。

メンタルマップとは、世界認識を調べるために、頭の中にある世界地図(メンタルマップ)を描いてもらう方法である。まずB4の半紙を配布して何も見ないで世界地図を書くよう指示する。時間は10分。大人でもいきなり世界地図を書けといわれてもなかなか書けるものではない。生徒も同じで、事前の予告なしで指示され、嫌な顔をする者、一心不乱に書く者、困つたように周りをきよろきよろ見渡す者など反応はいろいろだ。「何も見ないで地図を書こうとすると意外にわからないものだなあと思った。ある程度場所は分かっていたけど、大陸の形とかは全然書けなかった」(桃子)。

メンタルマップは生徒間で相当の差がでる結果になった。気になったのはアフリカがユーラシア大陸から離れて、独立した大陸(大きな島)として書いている地図、よつて、西アジアがすつぱり消えている地図が多かつたことである。120人にアンケートをとると、多くの生徒は、中学校でそれほど世界地理(もしくはアフリカなど)を習わないまま高校に進学し、自分からすすんで地図帳を開くことなしに2年生になったことがわかる。

メンタルマップを書かせた後、教科書の見開きの地図と自分の書いた地図とを比較させる。「見比べて一番の違いは何?」と投げかけ、いくつか確認する。①日本を中心に地図を書いた生徒がほとんどだが無意識に日本人の視点で世界をみている。②君た

ちが書いた地図の中で抜けているところ、それが君たちにとって、関心のないところ。③昔の人も、自分の世界を中心に書き、関心のないところ、わからないところは、君たちと同じように大雑把、または丸っこい形の表現になっている。世界地図を書けば、書いた人の世界認識がわかることに気づかせる。またその時代の捉え方が理解できる、逆にその限界もみえてくる。世界地図を書かせることは世界史学習の第一歩だといえる。

メンタルマップのあと、再びB5の半紙二枚を配布し、1枚目で「略地図」の書き方を教え、2枚目にもう一度「略地図」を自分で書かせる。まず最初に用紙を横にして横に2回折り、広げて真中の折れ線に赤道の線をひく。上の折れ線に北緯45度と書く。次に用紙を縦にして横に3回折る。広げて一番左側の折れ線を0°(子午線)と書き線をひく。そしてその0°を番号①とし、順に②～⑧まで記入する(⑧は左端の角に書く)。以下、図とともに1～12まで書き順を述べる(図1参照)。

- 1 線①0°の右側1センチで上から2センチの地点にAを書く。線⑤180°の右側にAと同じ高さにBを書き、AとBを結ぶ。
- 2 ⑦の線上、赤道より少し上にCを書く。
- 3 線⑦と線⑧の真中、用紙の最も下の方にDを書き、B・C・Dを結ぶ。
- 4 線①の左2センチ、赤道より2センチ下にEを書き、DとEを結ぶ(*用紙の両端⑧を合わせると書きやすい)。
- 5 点Cの右側にFとする。EとFを結ぶ。
- 6 線⑦と線⑧の真中、Bと同じ高さの点をGとし、FとGを結ぶ。
- 7 点Bの右側にHとし、GとHを結ぶ。赤道上で、線③右側1センチの地点をIとし、IとHを結ぶ。
- 8 線③の線上で赤道より上2センチの地点をJとし、線②と③の真中、赤道より少し上の点(Jより赤道に近く)をKとする。IとJ、JとKを結び、さらにKとAを結ぶ。
- 9 線①の左側1センチ、45度の下1センチの地点をLとし、AとLを結ぶ。
- 10 AとKを結んだ線と線②の交差する点をMとし、LとMを結ぶ。
- 11 点Lより1センチ下で、Lの左側に点Nを書き、MとNを結ぶ。
- 12 線①の右側2センチ、赤道より下3センチの地点をOとし、NとO、そしてOとMを結ぶ。

さらに、地図を書くときの追加項目をあげておく。

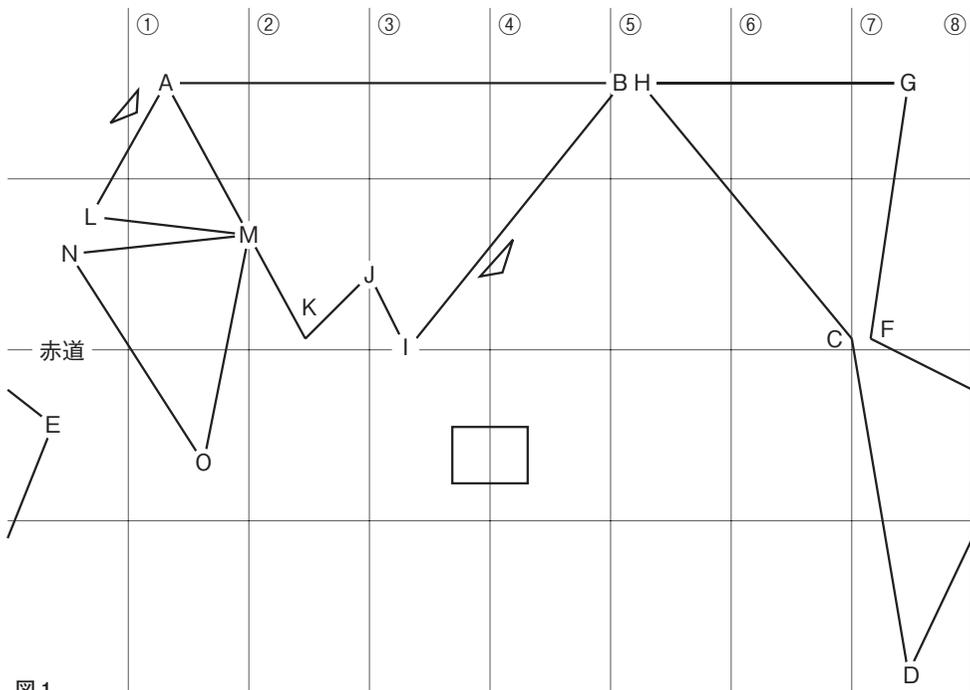


図 1

- 1 線④を中心にオーストラリアを書く（アフリカ南端と同じ緯度）
- 2 Mのところにペルシア湾を書き、OM線上にアラビア半島、紅海の切れ込み線を書く。
- 3 135度の線④と、HとIを結ぶ線の交差した地点に日本の明石を書く（略地図では無理がある）
- 4 子午線、線①0度の上に三角形のイギリスを書く。ロンドン、グリニッチを記入。
- 5 地図を書くときの留意点（小テストの採点基準・これができれば合格）Aの位置。Bは180度の東。Cは赤道より北。Dは地図の一番南。Eは赤道より南。Kは赤道につけない。Oは0度より東。NはLより西。
- 6 距離を考える。地球を1周すると約4万キロ。緯度1度が111キロ。
- 7 明石を中心にして、大体同じ緯度にあるところにイラクのバグダッド（線②の線上）、アメリカのワシントン、ロサンゼルスがある。地図上のIはシンガポール。Jはバングラデシュの首都ダッカ。アメリカ大陸ではほぼ北緯45度以北がカナダ。

生徒にはこの経線と緯線の入った略地図を書かせた上で、図1で示した略地図を踏まえて、以後はもっと簡略化した略地図、まさに「5秒で書ける世界地図」を教えて書かせてみる（図2参照）。

生徒の反応はどうだったのだろうか。授業後感想を書いてもらった。「略地図を書く際に、経線や緯線を上手に使うって書くことに驚きました。この二つの線はこのように地図を簡単に書くのにも必要ということを知りました」（賢）。この略地図のポ

イントは、子午線と赤道を基準として最低限の世界地理の位置を把握させることにある。略地図を書かせて、生徒は特にアフリカの正しい位置を知って素直な驚きを感じたようだ。「地図を1回書くのにすごく時間がかかってしまう。今回、この地図を書いて、アフリカ大陸は思っていたよりずっと北の方であることを知りびっくりした」（光子）。「アフリカ大陸とユーラシア大陸がつながっていることにとっても驚いた。普段見ているものなのにいざ書こうとすると書けないものだなと改めて実感した。自分の住んでいる地球の地図くらいはちゃんと書ける様になりたい」（麻美）。

また地図から世界に視野が広がった事に気づいた生徒もいた。「略地図を書いてみて、自分はいかに地図を注意深く見ていないかということがわかった。その中で、日本の所だけしかうまく書けなかったので、もっと広い視野を持って世界のことについて知って生きたい」（佳祐）。「大体うまく書けたと思う。だが、位置や大きさが確かでない所が多いのでしっかり練習したい。あと、日ごろから地図に関心を持ち、ニュースなどで流れた国や地域などその都度調べなどしていきたい」（倫太郎）。

さらに地図の苦手だった生徒も、略地図で地図に向き合うようになった。「あんなに簡単に書けるなんて驚きました。略地図を書けるようになってから、

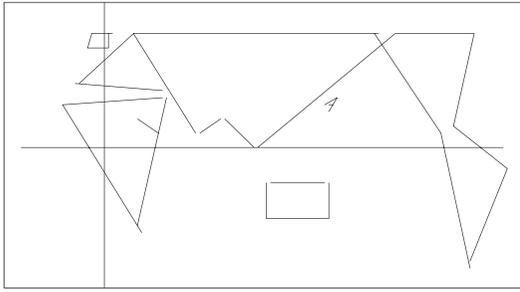


図2

大体の国の位置がつかめるようになりました」(彩)。

この略地図の長所は一筆書きのようにすばやく書ける点にある。「うまく書けたほうだと思う。一筆書きのような感じで世界地図を描けてしまうんだと思うと少し不思議な感じがしました。もっと複雑だと思っていたのに、こんな簡単に書く方法があるのかと、面白かった」(唯)。

授業で何度も書くうちに覚えてしまう。生徒も次第に自信をもち意欲につながる。「何回も書いているうちにだんだんうまく書けるようになってきました。やっぱり地図を書くには赤道とか経度とかを意識した位置関係が大切なんだと学びました。何も見ないで書けるようになりたいです」(美穂)。

無論、略地図なので、物足りなさを感じる生徒もいる。「一番最初はうまく書けませんでした。ポイントを教わり、すらすらとポイントをつかんで書くことです。略地図なのでアフリカのように消えてしまう地域があります。その地域に人はどうなっているのか？そして他の国で略地図を書くとき、やはり日本はないのか？ということが気になりました」(千恵)。「略地図にインドネシアが省略されているのは仕方ないだろうけど、なんとなく物足りない気がする」(和広)。しかしこのような感想をもったからこそ、この略地図から自分なりに修整していくことができる。なにが足りないのか生徒自身が気づき、自ら学んでいく。略地図はあくまでも略地図なのである。不完全な地図から生徒自ら学んでいく姿勢を授業からひきだせればと思う。グラフ1、2は1学期末にとったアンケートである。生徒は略地図を書くのがやや難しいとしながらも、書けばわかりやすいと感じているようだ。これで1時間目の授業終了。

2時間目に、ジョン万次郎の授業をおこなった。前回の略地図を使ってのいわば応用編である。最初に生徒に質問。「今は高校生でも簡単に留学できるけど、アメリカ合衆国の学校で学んだ最初の日本人

は誰でしょう？」予想通り反応がないので、晩年のジョン万次郎の顔写真をみせる。皆一斉に顔を上げる。「ジョン万次郎という人です。名前を聞いたことのある人は？」わずかクラスに1~2名。「童話に出てくる登場人物だと思いましたが、本当にいた人でびっくりしました」(夏樹)。

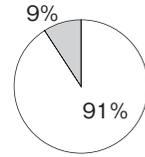
ジョン万次郎の数奇な体験は、はじめて世界史を学ぶ生徒にとっても興味関心をもちやすく、幕末・維新にかけての時代設定も生徒にはなじみやすい。「万次郎については以前にも何度か聞いたことがありました。正直、ジョン万次郎についての授業からはじまったので驚いていましたが、授業をきいて、今から世界史を学んでいこうとする私たちと何も知らない外国やさまざまな海へ旅立っていく万次郎がほんの少し似ているような気がしました」(僚子)。

次に略地図を2つノートに描かせ「これから略地図の中で、ジョン万次郎が辿ったルートを書いていきます」といって、黒板に略地図を大きく描きつつ、ジョン万次郎が漂流し、救助され、捕鯨船に乗って、大海原を旅する行程を生徒とともに略地図に線をひいていく。

一つ目の略地図では、漂流し、救助され、アメリカに着くまでを、生徒に質問をしつつ、ルートを引いていく。以下①~⑤はこの授業の要点である。

- ①「どこの国のどんな船に救助されたか？」。教科書に、バイキング船・ダウ船・帆船・蒸気船の絵があるので、何人かを指名。ためらいもなくダウ船を示す生徒には、タイミングを狂わせられたが、すかさず「こんな船です。アメリカの帆船です。」とジョン・ホーランド号の絵をかかげる。また彼の才能を見込んで、アメリカで教育をうけさせた恩人ホイットフィールド船長の写真を提示する。
- ②「ジョン万次郎のジョンは、この船の名前からとったそうです。それではこの船は捕鯨船ですが、鯨を獲ってどうしたのだろう。」生徒「肉を食べ

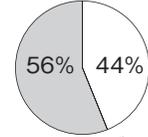
略地図を使った授業はわかりやすいですか？



□わかりやすい □わかりにくい

グラフ1

略地図を描くことは？



□やさしい □むずかしい

グラフ2

た?」。ここでアメリカ産業革命進展と捕鯨業の拡大とがペリーの日本開国へつながっていくことに注目させ、世界史的視野で歴史的事象を捉えさせる例とした。

二つ目の「略地図」では、航海士として捕鯨船に乗り、さらに砂金を元手についに故郷へ帰るまでのルートを書いていく。

③ジョン万次郎は一流の航海士となって、大西洋、インド洋、太平洋と航海し、今度は1849年10月マゼラン海峡を通して、サンフランシスコに行きカリフォルニアで砂金を掘る。「その砂金で何を買ったのだろう?」。

④1850年8月ハワイに渡り1本マストの捕鯨船(アドベンチャー号)を購入し、沖縄上陸に成功、長崎で取り調べをうけたあと、52年、土佐に帰り母と再会する。

⑤ジョン万次郎から聞き取りを行った土佐藩の学者が、世界地図に万次郎の航海ルートを線で書き込んだパネルをみせる。「おそらくこの学者も君たちを同じように興味深く線を引いたのかもしれないね。」となげかける。そして幕末から維新にかけて日本ですごした彼の後半生を簡単に紹介し、最後に「ジョン万次郎は何を日本に伝えたかったのだろう。」と質問して授業終了。

生徒が略地図にルートを書き込みながら、ジョン万次郎の数奇な運命を辿りつつ、これから学ぼうとする世界史への興味を高めさせていければと思う。ここ数年の授業を通して生徒が主に感じたことを主に次の四つにまとめてみた。

1. ジョン万次郎への共感

精神力の強さ、勇敢さ、適応能力、語学力。「まず授業のはじめに先生が“ジョン万次郎”と言ったのを聞き、一体この人は何だろう…と疑問に思った。話を聞いているうちに、すごい人だなと感じた。漂流したところから始まり、ほぼ世界一周をし、自ら英語などの語学を学んだのは、この当時から考えると、ものすごく奇跡のように感じる。そして最後はお母さんと再会できてよかったと思う」(麻美)。

2. ジョン万次郎をより深く知ることができた

「中学校の英語の時、授業を始める前に、先生が話していたのを懐かしく思い出しました。この時は、とても簡単に説明していたので、あまり興味はありませんでしたが、前回の授業で詳しく話を聞き、とても興味がわいてきました。自分も彼のように新し

いことにチャレンジしていくという精神を確固たるものにしていきたいと思います」(元気)。

3. 略地図だとよくわかる

「地図に書いて道筋を書くことによって、どんなところを通ったのかがわかりました。地名だけで覚えるよりも、地図に書き込んだほうが流れが覚えられる気がしました」(友子)。

4. なぜ世界史でジョン万次郎なのか疑問

「なぜジョン万次郎の授業を行なったのかわからなかった」(光)。「普通、今でも昔でもあんなふうになく話しが進むことはないだろう。ジョン万次郎の話の重要性がよくわからなかった」(佑一)。

このジョン万次郎の授業は、1年間の導入部「世界史の扉」として位置づけられるが、やや唐突的な内容になってしまったことは否めない。特に略地図を書かせることに重点をおいているので、どうしても西欧近代文化を吸収したジョン万次郎と幕末の封建社会との対比を浮き彫りにし、生徒に迫るまでにはいかなかったこともあり、何人かの生徒は戸惑いをもってしまったようだ。

この授業のねらいは、略地図を活用することによって、歴史の授業を具体化し、生徒がイメージを膨らませ、生徒の共感をもたらしことにある。ジョン万次郎はその一例にすぎないが、他にもストーリー性をもったテーマをとりあげている。たとえばマルコポーロ、イブン=バトゥータ、鄭和、マゼランなど。また現代史では、中学校の教科書にも載っている杉原千畝などである。

また、略地図を使った授業は、同時代的な把握を授業のねらいとする展開、たとえば「13世紀の世界」、「帝国主義の時代」などや、主に地域世界など前近代の単元をおこなう場合にも「略地図」のどの地域に位置しているのかを生徒に把握させる手立てとしても有効であろう。

最後に、あくまでも略地図であるから、略地図に頼りすぎず、教科書や図説などの正確な地図で確認することは必要である。また5秒で書けるといっても、当然それに関わる説明に時間が必要であるし、1時間の授業のどのタイミングで略地図を書くかが意外に難しい。うっかりすると略地図を書けないまま授業が終わってしまうこともある。あたりまえのことだが、教師側が略地図を十分に理解し、常に準備をしたうえで授業に臨むことが大事であることは言うまでもない。